



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	権力の観点から見る夫妻の役割分担 : 未就学の第1子を持つ共働き家庭に着目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	孫, 詩彥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14159号
Issue Date	2020-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78892
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sun_Shiyu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士(教育学)

氏名：孫詩彥

学位論文題名

権力の観点から見る夫妻の役割分担

—未就学の第1子を持つ共働き家庭に着目して—

低年齢の子どもを持つ夫妻の就労が増えていく中で、家事育児分担がこれまで以上に課題となる。共働き夫妻の役割分担は、一般的に平等度が高いと思われる。にもかかわらず、そのうち伝統的な性別分業に規定されない平等な役割関係を形成しているのは、子どものいない夫妻のみであることが明らかになっている。本研究の目的は、子どもの誕生と成長を夫妻が共に経験していくなかで、共働き夫妻の家事育児分担・調整に何が起こるかを実証的に解明することである。

第1章は役割分担の研究を整理した。妻の妊娠や子どもの誕生・成長に合わせ、家事育児をどのように分担して遂行するかが動的に調整されていく。この調整は決して妻のみで行われることではない。しかし、先行研究では、家事育児の負担をもっぱら妻・女性が抱える問題として議論している。夫妻双方を対象にし、それぞれが役割分担・調整をどう捉え、その役割分担が経時的にどのように変化するかを明らかにする研究はほとんどなされていない。

そのために行われた本研究の調査を第2章で説明した。本研究は共働きで未就学の第1子を育てる夫妻双方、合計20カップル・40名に個別インタビューを行った。調査は保育施設経由で依頼し、東アジア(中国と日本)の都市中間層である核家族に絞る形で調査対象の条件をコントロールした。調査では夫妻ペアのデータを集め、結婚・同居から調査時点までの役割分担の動的な交渉・調整のプロセスを把握した。その結果、子どもが生まれてから夫妻の役割分担が偏り、徐々に変更に向けた働きかけのない状態になっていくことが分かった。本研究ではこの状態を「役割分担の硬直化」と呼んで分析を行うこととした。

第3章では分析の際に用いる権力の観点を検討した。本研究は家庭内の権力を、社会全体の規範や構造と関連させ、「役割分担の交渉・調整において、資源や規範などを駆使・組織する力」として捉える。従来の研究は夫妻間の明らかな交渉に見られる抑圧・抵抗などで権力を把握しているのに対して、本研究の議論は夫妻間に潜む「水面下」の権力に焦点を当てている。この水面下の権力である潜在的権力や不可視的権力を捉えるために、夫と妻による過去の想起と、同じ場面に居合わせた夫妻双方の事柄に対する捉え方や解釈の異同という二つの視点から考察する。

第4章と第5章はそれぞれ、子どもが生まれる前と生まれた後の役割分担・調整を分析した。子どもが誕生する前の家事役割は自立する成人同士の間で分担され、遂行の繰延や代替などが見られる。この時期は夫妻間で明らかな交渉をする頻度も高く、そこに顕在的権力の作用が把握される。一方、子どもが生まれることで現れる育児役割は不可避的で繰延不能であり、それに合わせて家庭役割の遂行が全体的に組み直されていく。こうした家庭役割の性格の変化に加え、子どもが意思表示できるようになるとともに、子どもとのかかわり・関係性が夫妻間の役割分担・調整に影響する要因となる。それまで育児によりコミットしてきた人が、子どもの「指名」によって、引き続き育児役割を担うことになる。また本研究では、子どもと同性の親の分担が促される、す

なわち、子どもの性別も夫妻の役割分担・調整を左右する要因となる可能性が示唆された。夫妻は子どもが生まれて初めて本格的に育児をする「初心者」である。そのため、役割分担について、自分の意思を主張するよりも、世間一般に流布する規範や言説を検証的に用いることが多い。子どもの誕生により、マクロレベルに構造化されたジェンダーや育児に関する規範が、ミクロレベルの夫妻の役割分担にダイナミックに浸透する。

第6章では、子どもが生まれてから夫妻間の交渉がなくなり、役割分担の硬直化が進むことを中心に検討した。調査時点の役割分担を見ると、夫妻で交渉をしているカップルや、役割分担を調整可能にするための経験・資源・スキルを夫妻とも得ているカップルは限られている。かつては役割分担を調整していたが、その後硬直化が進むカップルや、夫妻間でそもそも交渉をせずに不平等な役割分担を納得するカップルのほうが多い。この状況を理解するために、家庭役割と稼得役割の分担・調整の両方に目を向けて検討した結果、夫と妻はそれぞれ、家庭役割と稼得役割に関して異なる経験・資源・スキルを得ていることが分かった。こうした経験・資源・スキルの積み重ねは時間と共に行われていくため、後から補うことが難しく、夫妻間での交替と共有が容易にできない。夫妻はそれまでの交渉・調整の経験と、子どもが生まれることで夫妻の実践に浸透してきた世間一般の規範に基づいて行動することが多い。子どもが成長し、また、夫妻それぞれを取り巻く状況が動的に変化する中で、夫妻間では互いの事情を知っている「つもり」で交渉しなくなる傾向が見られる。これは、子どもが生まれた後に、顕在的権力の作用がだんだん消えていき、潜在的権力と不可視的権力を中心とする権力作用へと移行することを通して把握される。

終章では研究結果の整理と考察を行った。本研究を通じて明らかになったことは、次の3点である。第1に、本研究がペアデータを集めることで描き出した夫妻のリアリティとは、夫と妻は一緒に暮らし、同じ事象を見ている、物事の捉え方や見え方に違いが生じることである。夫妻間の認識のズレや異なる経験・資源・スキルを得るプロセスが調査を通して明らかにされた。

第2に、共働きで学歴も収入も相対的に高い都市中間層カップルは、夫と妻が一番「無難な選択」をし続けてきた結果、家庭役割が妻に偏る局面にたどり着き、夫妻が役割分担を調整する余地が狭められる。このプロセスを権力の観点から分析したところ、夫妻間の意図的な強制や抑圧という顕在的権力よりも、潜在的権力や不可視的権力が夫や妻の意思に作用する形で役割分担の硬直化を促していることが分かった。具体的に本研究では、権力が「現在」の要因のみに規定されるのではなく、「過去」から積み重ねきた経験・資源・スキルによって強化されることと、子どもをはじめとする第三者の存在も夫妻間の権力作用に影響を及ぼすことを示した。

第3に、公平や正義の意味で夫妻の平等な役割関係を論じてきた従来の役割分担研究に対して、本研究は夫と妻が役割分担を調整する意思と、夫妻間で役割分担の互換と代替を可能にするために必要な経験・資源・スキルで担保される役割分担の調整可能性に注目する必要性を提示した。役割分担の硬直化が進むカップルにおいて、調整の前提となる夫妻間の交渉そのものが、子どもが生まれた後から潜在的権力・不可視的権力を伴う形で行われなくなっていくことを明らかにした。

本研究では、夫妻双方から得たペアデータを通文化的に分析することで、役割分担・調整をしようともできない硬直化が進行していることを権力の観点から明らかにした点で意義がある。一方、中日の異なる文化背景や雇用慣行などを踏まえた議論、夫妻の役割分担とジェンダー構造の関係性についてのさらなる議論、子どもの性別要因などもが示唆されるなかで子どもの成長に合わせたより長いスパンでの夫妻関係の検討が今後の課題である。